

興福寺蔵『観菩三十講表白』について

多 川 文 彦

興福寺には『観菩三十講表白』と言う名の文書が所蔵されている。この事は興福寺の子院の一つである菩提院の機能と性格についての考察を行つた際に判明し、この表白文は奈良国立文化財研究所編『興福寺典籍文書目録』にも収録されず未調査の文書であつた。『観菩三十講表白』の「観菩」という言葉は興福寺の子院である観禪院と菩提院の頭文字を取つた名称となつてゐる。この二つの子院で執り行われる三十講

は『興福寺年中行事』や『大乘院寺社雜事記』などに記録されていることから、興福寺における重要な法会であつたと推測させられるが、法会の内容や実態など不明のまま今日に至つてゐる。今回は興福寺に伝わる『観菩三十講表白』の紹介と分析、周辺諸史料を通して興福寺における観菩三十講の実態と本表白の史料的价值について若干の考察を試みたいと思う。

『観菩三十講表白』は三十講の目的と意義を述べる表白の言説のみならず、法会勤修の為に諸神の来迎を請う神分・勧

請、經典の提示と経釈、回向を含む構成で記されている。小稿では紙数の都合上、冒頭に記される表白部分について確認してみたい。

①謹_ミ敬白法報應化三身如来有空中道一代聖教地前地上菩提薩埵有學無學賢聖衆僧惣_ソ、同牀別牀_ノ一切ノ三寶_ニ而曰方_ニ今興福伽藍滿寺諸徳為_ノ毎年不退ノ勤行ト講シ二十八品ノ妙文ヲ調ヘテ嚴重之梵席ヲ修數座之講肆ヲ事有_リ

一切の三宝に対し謹み敬つて啓白する文言から始まり、この三十講では興福寺における諸々の諸徳のために「毎年不退の勤行」とし、『法華経』の「二十八品の妙文を講じ」ることが記されている。「有空中道」という文言が見られるが、法相宗では仏一代の教法を有空中の三時について有空の二執を打開するため『解深密教』などを説き、宇宙の真相は非有非空の中道として把握される。こういった法相教学の根本的思想を表白の文言の中に盛り込んでいる様子は以下の文にも続いてゆく。

②其志趣何^レ者^{ナラハ}夫^レ諸佛出世ノ本懷者為^メ開^{カン}直^ジ至道場之要門^ヲ與法利生^ル根元者莫^シ過^一論談決擇之惠業^ニ依^一之^ニ所謂^{スル}者大乘對法之奧藏性相決擇之淵源也披^ク文^ヲ則^一三性無性昏旦ノ金鏡遮^ル眼^ニ討義^ヲ亦非空非有巨夜ノ銀暉浮^ム心^ニ法門之樞鍵^{ナリ}抑又惠海之玄源^{ナル}者ノ歟是以講^{スル}之^者ノ必^ニ預^一滅罪生善之巨益^ニ學^一之^人者速^ニ滿^一現世當生之悉地^ヲ愛^ニ宿福多幸^ニ而苟^ム護法中宗之流^ヲ可^レ悅^一可^レ勇^一不可^一不^一修^セ（傍線は筆者による）傍線を付した部分など、ここでも唯識思想に基づく難解な修辭が成されている。また諸法の性や相についての研究を法相宗や俱舍宗では行われており、性相學と称している。これを講じて學ぶ者は必ず大きな利益に預かり、「護法中宗の流」を酌むことが出来ると述べられ、勉學に勇むべきことを記す。「中宗」とあるのは先に見た中道の宗旨であり、法相關係の文書では豊富に見られる文言である。

③因^テ茲^ニ為^メ每年不退之宏規^ト刷^一一乘開講之梵場^ヲ候祇^一為^メ勸^ンカ
一幻學ノ讀仰^ヲ暗^ニ學^ク一乘ノ疑問^一
ここで注目すべき点は「一乗の疑問を挙」げる文言が記されていることであろう。周知の通り興福寺を中心とする法相宗の教學は三乗教に基づく教理が展開されている。一乗教の疑問点を挙げて諳んじることを求めており、『法華經』をあくまで三乗教の立場で講讀する様子がこの文言からは窺われる。なお法相教學の立場における『法華經』の解釈と研究は

慈恩大師基における『妙法蓮華經玄贊』、慧沼の『法華玄贊義決』などの著作があるが、日本においては解説上人貞慶による『法華開示抄』がある。

④是以臘月^ニ聚^メ雪^ヲ一始^メ開^キ細帙^ヲ送^リ春^ヲ迎^ヘ夏^ヲ久^ク續^ム熏修^ヲ
通夜叩疑水^ヲ東風漸^ク和終日^ニ厭^ハ朦雲^ヲ春^ノ霞尚殘^ル遂使孟夏
今朝赴^ク一實^ノ寶城^ニ每日朝暮開^ク數日^ノ疑問^ヲ事既^ニ鄭重^{ナリ}福寧^ム
唐捐^{セン}哉 若爾者 梵風遙^ニ扇^テ法燈永^ク繼^キ冥助無^ニ怠^一三會^ノ
晚^ニ至^{ラン}祈願旦千^{ナリ}啓白詞短^シ三寶諸天悉知證明^シ給^ヘ

ここで想起させられるのは後述する「観普ノ加行」と呼ばれる毎日講という加行形態である。日頃夜もすがら勉學における疑問を抱えながら一日を過ごす様子が述べられる。なお、表白の後には神分の部分が収録され、諸神の来迎や施主御願の満願を祈願する文言が収録される。そして諸仏菩薩の来臨を要請するために七語二十五節の句によって構成される勧請の文言が述べられる。勧請の次には経釈の部分に入る。本表白には「無量義經德行品第一」と「妙法蓮華經提波達多品第十二」の経釈が収録されている。

さて、観禅院と菩提院については菅家本『諸寺縁起集』における興福寺の記事に詳細な記述がある。なお、菩提院については拙稿において指摘した通りなので詳説を避ける。観禅院は菩提院と同様に三十講が行われ、正暦三年から始められたとある。菩提院における三十講と同時期に成立した講と考

えられるが、菩提院の三十講が朝勤上人なる人物によつて始められたとあるのに対して、観禅院の三十講は「禪宗人」が始めたという点において食い違いが生じている。また『興福寺住侶寺役宗神擁護和讃』（以下『和讃』と略）には、出家を志す者が興福寺入寺以降、様々な経験をしながら法会や講に出仕していく様子が述べられ、法会や講の出仕による昇進の過程を窺うことが出来る。この『和讃』には七臈になる時点で「観苦ノ加行」と呼ばれる行に入り「毎日講」を勤めると述べる部分がある。毎日講というのは学僧の卵が適齢期になると行なう個人的プラクティスのことで、このプラクティスが観苦三十講に関わっている点からこの加行を「観苦ノ加行」と呼ぶ。毎日講は一日二題のスタンダードな唯識論義をマスターすることを目標とし、二題の論義は別々に行なわず一度に行なう。毎朝指導僧が行者部屋に入ってきて、行者は指導僧と問答する。こういった毎日講を勤めた行者が観禅院・菩提院で行われる三十講で登高座して、法会に出仕している問者と論義する。三十講の期間は十五日間であり、二年かけてこの加行を行っていた様子が『和讃』から窺われる。なお「観苦ノ加行（毎日講）」は初年・二年共に百日間行なうため、合計四百題の基本的な論義を頭に入れるということになる。こういった点からも観苦三十講が学侶にとつて初期段階の重要な教学プログラムであったことが理解されよう。法相宗に

おける初級クラスの加行と講を経て、『和讃』の続く部分には重要な法会の役をこなしてゆく様子が述べられている。また鎌倉時代の学僧良遍による『護持正法章』には興福寺で執り行われていた三十講について興味深い言及が成されている。⁽²⁾「三箇院三十講。并両講等出仕不可懈怠」とあり、観禅院・菩提院に加えて興西院と呼ばれる子院を含めた三つの子院で行われる十五日間の三十講に懈怠なく出席し、教学研究に励むことを理想としている。また「不披当卷而勤仕三十講并及競望之條。未曾有之非法也。」とあり、三十講に出仕するに際して、当該の巻を開かずに出仕する行為は勉学の意欲が無いに等しく、こういった行為は未曾有の事態であると述べる。三十講に出仕する者は、その巻を学んだか否かが問われるべきであるとし、学んでいない場合は寺院からの追放を含めた厳しい処分を与えるべきことを主張している。そして学道を退き、観禅院と菩提院の三十講の出仕を省略することは誠められるべきであると述べており、観苦三十講が興福寺の学僧教育にとつていかに重要な位置を示していたかが理解されよう。特に同書には「観苦講師。必可被勤之。非広学者難随公請」とあり、三十講の講師になることが僧位昇進のため必須条件であったことが窺われ、講師としてあるべき姿を提示しようとしている。三十講を「規模の学道」と位置付け、競つて勉学に励むことを求め、毎年「不退の勤行」とされるべき

法会と述べる点から、小規模な寺内法会とはいえ、将来の興福寺僧徒に相応しい学侶を育てる重要な現場であったことが窺われる。このように興福寺における観菩三十講は学侶にとつて決して軽視することの出来ない教学研究の現場であったと言えよう。良遍は当時の法相宗の学侶における修学の杜撰な状態を目の当たりにしてこの著を書いたと思われるのだが、特に今まで見てきた観菩三十講について強く記している点からすると、仏門に入った学侶に対するメッセージとして、法相教学における基本的なプラクティスの重要性を主張しなかったのではないだろうか。

§ § §

今回発見した『観菩三十講表白』の奥書部分には、延享二年四月朔日に三十講を始めるにあたり、円明院住の英秀が講師を勤めた表白を借りてきて書写したとある。今回紹介した『観菩三十講表白』は延享二年の銘記がある江戸時代の写本ということもあり、この史料をもって興福寺において脈々と行われてきた三十講の内実に迫ることについては聊か強引ではあるが、中世寺院における法会や講の実態については東大寺をめぐるものが多く、興福寺については維摩会や慈恩会に注目される現状がある。そのため、今回の文書発見は、未解明であった興福寺における寺内法会の実態解明に微弱ながらも寄与できる成果と言える。今後は『観菩三十講表白』の正

確な翻刻作業を試み、引用転籍・表白作成の担い手等の問題も含め、興福寺における三十講の実態解明に繋げていくことが重要な課題である。

- 1 拙稿「寺社縁起の再生産とその変容——「稚児観音縁起」をめぐって——」（『印度学仏教学研究』一〇三号、二〇〇三年）、同「興福寺における菩提院の性格とその機能性について」（『印度学仏教学研究』一〇五号、二〇〇四年）
- 2 蓑輪顕量「中世興福寺に見られる身分意識と修学の理想——良遍の『護持正法章』を手がかりに——」（『大倉山論集』四三号、一九九九年）
- 3 平岡定海「中世寺院に於ける講について」（『日本歴史』一四五号、一九三五年）、永村眞「中世東大寺の組織と経営」（『塙書房』一九八九年）、同氏「中世寺院史料論」（吉川弘文館、二〇〇〇年）

〈キーワード〉『観菩三十講表白』、興福寺、三十講、学僧教育
(佛敎大学大学院)

151. The Ancient Manuscript *Kanbo-sanjukko-hyobyaku* Owned by Kōfuku-ji Temple

Fumihiko TAGAWA

The ancient manuscript called *Kanbo-sanjukko-hyōbyaku* (観菩三十講表白) is owned by Kōfuku-ji Temple. This manuscript was discovered by the author when investigating the function and character of Bodai-in Temple last year. Bodai-in Temple is one of the branches of Kōfuku-ji. This ancient manuscript had not been studied yet. The 'Kanbo-sanjukko' (観菩三十講) is one of the religious meetings held by Kōfuku-ji. Priests were educated there. But, the manuscript has an endorsement written in the Edo period. Therefore it is rather difficult to get exact knowledge of the meetings held in ancient times. However, I believe that this manuscript can contribute to the clarification of the nature of the varieties of meetings in Kōfuku-ji.

152. Eison's Reform in Understanding the Precepts for the Lay Buddhist

Yuka Ōtani

In this paper, I study Eison's 叡尊 (1201-1290) understanding of the precepts on the basis of writings by three people: Genrin 元輪 (1278-87), Jōsen 定泉 (1273-1310-), and Eishin 英心 (1263-1310-) who belonged to the Eison lineage. Eison's understanding of the precepts will be consolidated in the following points. (1) Laymen who receive precepts through *Betsuju* 別受 are permitted to divide them and observe some of them and/or to delimit time to observe some of them. (2) Even if laymen violate precepts, those who receive precepts through *Tsuju* 通受 are guiltless. (3) For Buddhist priests, the working of *avijñapti* (*kaiai*) is strengthened because priests who receive the precepts through *tsuju* swear to live as bodhisattvas. However, the same crime as the Hīnayāna is applied when precepts are violated. As mentioned above, Eison reformed the understanding of the precepts for people with a weak relation to Buddhism, in order to construct the system that gives the people precepts by priests who are bodhisattvas, and makes laymen's Buddhism